

# 東南海地震から50年

## 「尾鷲を襲った地震と津波」

はじめに.....	1
宝永の地震津波.....	2
安政の地震津波.....	6
東南海地震津波.....	1 1
チリ津波.....	1 7
おわりに.....	1 9
尾鷲地震津波年表.....	2 0
津波到達線想定図.....	2 1

開示期間

**平成6年12月7日～28日**

尾鷲市中央公民館郷土室

## はじめに

私たちの住む尾鷲市は、古来より多くの地震と津波に見舞われ、そのつど被害と犠牲者を出しています。その中でも江戸時代に2度・昭和に2度の地震・津波では甚大な被害を被りました。

今年、この4つの地震・津波の中の安政[嘉永]地震と東南海地震からちょうど140年目と50年目にあたることから地震と津波の惨事を再び繰り返さないために、当館の資料や聞き取り調査などを主に展示しました。

この4つの地震と津波と概要は、

### ★宝永の地震・津波

宝永4年10月4日[1707年]正午頃、東海道沖と南海道沖とからほとんど同時に発生した巨大な双子地震で、この両地震の時差は数分であったと考えられています。

被害は全国で潰家29,000軒、死者4,900人、家屋倒壊範囲は東海道から中国、九州にいたる沿岸を襲い瀬戸内海にも達しました。[マグニチュード8.4、津波高4m。]

### ★安政[嘉永]の地震・津波

嘉永7年11月4日[1854年]午前9時ごろ、遠州南東部の海底を震源地とする地震で、家屋倒壊範囲は伊豆から伊勢にいたる沿岸と甲斐、信濃、近江、越前、加賀に及び、津波は房総から土佐にいたる沿岸を襲いました。

被害は、倒壊流出8,300戸余、焼失600戸、圧死300人、流死300人。[マグニチュード8.4、津波高3～4m。]

### ★東南海地震・津波

昭和19年12月7日[1944年]午後1時36分頃、紀伊半島東方に発生した地震で震源地は志摩半島の東南40km。

被害は主に愛知、三重、静岡で、地震にともなう津波は伊勢湾、熊野灘沿岸にかけて襲いました。

被害は、死者1,223人、負傷者2,864人、全壊17,599戸、半壊36,520戸、流失家屋3,129戸、浸水家屋8,816戸。[マグニチュード7.9。]

### ★チリ津波

昭和35年5月23日[1960年]チリのチェロ半島で大地震があり、それにともなう津波が翌24日午前2時頃から日本各地の海岸に襲来しました。三陸海岸では津波高が6mにも達し、三陸海岸を含め北海道南道、志摩半島などで大きな被害が出ました。

被害は、死者119人、行方不明者20人、全半壊3,754戸、流失1,259戸[津波高3m]

そこで郷土室では、市内に遺る古文書・記録をはじめ供養塔等からこれら4件の地震津波を見直し改めて先人の遺した教訓を今後に生かす資料となるよう編んでみました。

## 1. 宝永の地震・津波

当市に残る資料は、「見聞闕疑集」・「宝永海嘯ノ記」・「大庄屋文書巡見使御用留」と供養等の三界万霊塔「馬越」・「中村山」・「三界万霊地蔵尊」(岩屋堂)が知られている。これら上記の資料をもとに宝年地震・津波を観てみる事にする。

### A. 地震発生のおよす

「宝永海嘯ノ記」には、「晴天化(他?)日に異なり例ならず温なる日也」これよりすれば、宝永地震の当日はまれにみる小春日和であったことが記され、地震の前ちよ的なのが考えられる。

地震の発生時刻は、「見聞闕疑集」によれば「宝永四亥年十月四日午刻大地震」、「宝永海嘯ノ記」では「午の中刻俄に振動大地を動し」とあり両者とも正午すぎに発生したことを報じている。正午すぎに発生した地震の状況を「見聞闕疑集」には「山々崩れ家蔵石垣等をもゆりくすし」、「宝永海嘯ノ記」では「古き家はゆりつぶすべくも見へ稀り外へ戸板又は疊やうの物取り出し地震ゆりさげん事を恐れて其上に益ミ居皆々肝をひやし只神仏の御力を祈ル計り也古キ土蔵は土壁を落しけはしき山は崩れて落野鹿林の禽犬猫迄も驚き騒ぎ物すさまじき有様たとへん物なし半時程して地震漸く止ミ」と大地震の状況を克明に記しているが、馬越の「三界万霊塔」には「大震有山邑山崩圧邑」と簡単に記している。

「宝永海嘯ノ記」の「半時程して地震漸く止ミ」とあるのは、半時(1時間)に及ぶ地震は、初期振動からの時間であろう。

これら上記の史料には、地震による被害は記述されておらず津波に比して被害は小さかったものと思われる。

### B. 津波来襲のおよす

津波が来襲するおよすについて「見聞闕疑集」では「潮夥敷わき出高波波高は浜表にて一丈六尺という」と形容し、この津波に九死に一生を得た小河嘉兵衛の体験を記した「宝永海嘯ノ記」には「諸の漁船も驚き帰る沖の模様を尋るに何とやらんすさまじき気色のよし魚人の物語り聞にもものうく人々又沖のみに気をつけ詠居たる其れ内半時ほど過ぎる浪打側も何とやらん颯々と物すさまじく水の色も赤土をこねたるごとくに見ゆる中にも賢老人是は昔より聞及びたる津波とやらが来るにて有らんと云出す夫より我先にと逃げ出し中井本町筋より後を見かへれば半町も後より只ぐはらぐはらはらはらと鳴り渡す空ハすすのけむりにて黒雲の落ちたる様に見ゆるそれよりいよいよ息を限りに中村山を心かけ逃げのび後ろを見かへせばはや在中海となりて汐のさし引大川の早き水の行よりもすさまじき其間に家倉は桴となる早き汐のさしひきも一時ほとしてやミ本のごとく陸となれり」と地震後半(1時間)程して来襲した津波の速さ・退き潮の強烈さを描写するものである。

また馬越の「三界万霊塔」には「男女老幼漂流大洋遽然不返見物断腸」と沈彫し津波が人をのむ惨状のすさまじさを表している。

地震後の海の状態は「水の赤土をこねたるごとく見ゆる」と海水の異常にも充分注意する必要性を説いている。

### C. 津波の被害

津波の被害は、「見聞闕疑集」には「前代未聞の大変なり」とこの津波を形容し、「高浪に先役の諸帳面諸書付流失由へ是より新に改る」と大庄屋文書の流失を報じ「先大庄屋小門興助家内不残流死」大庄屋小門与助一家は全滅し、その供養等「三界万霊・小門一家・流死仏・宝永四丁亥十月四日・嘉永二年七月松野屋忠蔵建」は中村山北西麓に建設されている。

この小門与助流死後善後処理の任にあたったのが「見聞門疑集」の撰者仲助一（後に源十郎と改名）である。

津波の被害の詳細は、「宝永海嘯ノ記」に「潮のあがりたる限りハ、西ハ今御目附屋敷の前まで、北ハ川筋の通坂場の後迄金剛寺堂へ汐二三尺上ル庫裡ハ半分ねぢ切ル、南の方家拾軒ほど残り林浦助九郎屋敷までに留まり、今町ハ六太夫家半分残り浪先は垣の内 博八屋しき迄行、堀ハ町留り迄野地ハ下横町六分通り流る敷右衛門ハ残り其外ハ不残流れ行」と記述され、これよりすれば当時尾鷲のほとんどが被害にあったと考えられる。

その流死者の数は、「見聞闕疑集」では「惣而流死者五百三拾餘人」、「宝永海嘯ノ記」には「尾鷲五ヶ村にて老若男女死人千餘人と書記ス其外旅人の死する数は不知則（測の誤りか）間越の麓に千人塚と申あり是。る人なき死人かたち見分ヶかたき死人を大なる穴をほり一所に葬る」ここにある千人塚とは、馬越の供養棟の事でありこれには、「男女老幼溺死者千餘人」と流死人数の相違がみられる。

千という数は、あまりにも死者が多かったという表現であるとされていたが、藩への報告には堀北浦が全滅したため、この差異がでたと考えられ、千という数は堀北浦を加えての総数とするのが定説となっている。

このように流死人数も多数であったが、流失・倒壊などの家屋の被害もまた大であった。

尾鷲地域の被害は、以下の通りである。

### 宝永の津波被害表

地名	記 事	波高（推定 M）
水 地	少々残る（見聞闕疑集）	
天 満	過半残る（見聞闕疑集）	
掘 北	470人程流死か？	8～10M
中 井	264軒流失（大庄屋文書巡見使御用留）	
野 地	30軒残る（見聞闕疑集）	
南	125軒流失（大庄屋文書巡見使御用留）	
林	20軒余残る（見聞闕疑集） 134軒流失（大庄屋文書巡見使御用留）	
矢 浜	半分程残る（見聞闕疑集） 53軒流失（大庄屋文書巡見使御用留）	6から7M
向 井	1軒流失（大庄屋文書巡見使御用留）	
大曾根	少々流れる（見聞闕疑集） 11軒流失（大庄屋文書巡見使御用留）	
行 野	少々流れる（見聞闕疑集） 1軒流失（大庄屋文書巡見使御用留）	
九 木	浜端し流れる（見聞闕疑集） 53軒流失（大庄屋文書巡見使御用留）	5～6M
早 田	別条無し、波入らず（見聞闕疑集）	
三木浦	波入る（見聞闕疑集）	
三木里	貴船神社流失（神社漣棟札）	
古 江	波少々入る（見聞闕疑集）	
賀 田	浜道り全部流失、11人流死（市史上巻）	8～9M
曾 根	波少々入る（見聞闕疑集）	4～5M
梶 賀	波少々入る（見聞闕疑集）	
須賀利	半分程流される（見聞闕疑集）	4～5M
長 島	在中流され500人余流死（津波碑）	5M

註・本表の津波推定高は、地震研究所彙報53号「三重県沿岸における宝永・安政東海地震の津波調査」羽島徳太郎によるものである。

#### D. 復興のようす

未曾有の打撃を受けた尾鷲地域に対して、藩のとった対策は、「見聞闕疑集」によると「水野九左衛門殿幸田彦左衛門殿御兩人浦々御見分の上残りの人数へ米味噌塩着類農具漁具糸取車唱歌山5御廻し在々江被下置候米は在々御蔵5御出粥米として被下命を助り誠以難有奉存候儀灘尽筆紙候」と救援物資を送付し、「亥年の御年貢御赦免其上山海の稼元銀夫々御見計ひ御貸被成下候」とあるように税に対しても優遇した。しかし、この災害から2年たった尾鷲の状況は上記した藩の救済が微々たるものであったことが証明される。これは、「御巡見衆様御尋被遊候ハハ可申上品、尾鷲組、宝永六年丑極月日奥熊野尾ハシ組流失己後建物の品書上帳」という巡見使御用留に遺されている。この書上帳の内容を表にすれば下の通りである。

#### 宝永の津波2年後の復旧状態

地名	流失	本屋再建	来春再建予定	小屋がけ	
九木	53	20	3	30	
行野	1			1	
大曾根	11	3		8	
向井	1	1			
矢浜	53	8	2	43	
林	134	17		117	
南	125	22	2	101	
中井	264	52	1		
計	642	123	8	300	
%	100	19, 5	1, 2	46, 72	(32, 97)

これよりすれば、20%弱が復興したにすぎない。これは、漁村であるため多くの人が網・漁船等の漁具を流失したものが少なくなく、またあまりの貧困であるため復興が容易でなかったためであろう。

#### E. 要因

地震後津波まで1時間程の時差があったにもかかわらずこのような大惨事となった原因として以下の4点が考えられる。

まず、「見聞闕疑集」には、「延宝元禄の頃も津波入候得共少々の儀にて候慶長九年にも津浪入候よしに候得とも人家を流し候程の事ハ無之由申伝へ候」このような記憶が、津浪に対する警戒を怠る大きな理由であったことが窺える。

2として「宝永海嘯ノ記」にある「外へ戸板又は疊やうの物取り出し地震のゆりさげん事を恐れて其上に益ミ居」という地震に対する恐怖に時を費やしてしまったこと。

3点めは、馬越の「三界万霊塔」に沈彫される「殊尾鷲邑開水道於左右前面海広背後山高故怒涛自三面競超而廻避無方」という尾鷲湾の地理的要因であろう。

4点めには、海岸あたり二密集した集落であるがゆえに倒壊家屋等により避難を困難にしたもの

と考えられる。

上記した 3・4点めは不可抗力であるにしても、地震後の津波を想定すればこの惨事も軽減できたであろう。

## 2. 安政(嘉永)の地震・津波

当市に貴存する史料の中から郷土史にて収集し得た「津なみ」(若林多仲著)・「嘉永海嘯ノ記」(念仏寺過去帳)・「大庄屋上申書」(北牟婁郡地誌)・「九木浦庄屋御用留」を資料として安政(嘉永)の地震・津波を観てみることにする。

### A. 地震発生のおよび

「津なみ」「嘉永七年申寅の夏六月拾四日大地震ありて在中こぞつて程遠き所へ逃延び金錢衣類はいふに及ばず諸道具を持運び中村山に小屋をしつらひぬ」と既に6月に地震があり中村山に避難するほどの大きさであったことを記している。

「九木浦庄屋御用留」にも「嘉永七年申寅十一月四日己巳の日にて中段とる下段さしと申日也尤当年は七月閏也六月十五日ニも大地震有之右四日は晴天ニ而西気なれとも南風吹也」と同じく6月の伊勢・伊賀・大和を中心とした地震の事を記し、大地震前の地震に注意すべきことを指しているが、地震の前ちようというべき気象の異常性は記されていない。

地震の発生時刻と状況について「津なみ」では「我等朝飯を喰ひて少し考える事ありて書見ありしが地震甚しくして大に震ひ出せし故家及倒ん事を気づかハしく裏に出んと水壺の水ゆり溢れ棚にある物転び落薪の積たるハ崩れいかがハせんと怖ろしく裏に出るに」と朝食後に起きた地震の状態を克明に記しているが「九木浦庄屋御用留」には発生時刻地震の状況に対して詳しく記されている、「同日辰下刻俄ニ大地震有之我等家ニ居候故去六月神戸四日市辺の事と思ひ直接外へ逃出蔵の前の屋敷ニ立居ル所地震益々強く其音は山谷ニ響キ前の堀石垣崩れ込地面一寸二寸三寸程ツツ堅横ニ割れ込凡一時間程も長く振動ニ而最早土蔵納屋ニ至迄震りくずすべきト存ル有様也」と辰下刻(午前9時頃)に大地震があり、その地震は地割れを生ずる程の大きさであることを記し、「一時程も長く」とあるのは、地震が長かった事の形容であろう。

「嘉永海嘯ノ記」には、「大変の地震ゆり出し直ちに広庭江飛出し石疊の上にて暫り行み」とあるようほとんどの人が、このように大地震の強烈さに恐れおののき狼狽のあまりなすすべもなかった事であろう。

しかし、「津なみ」の著者若林多仲は「兎角家のたをれて矢火のあらん事を恐れ竈に水をそそぎ火鉢手爐烟早盆など都而火のある物を裏の中央に出し」と地震に伴う火災を恐れて火の始末をしていることは特記するに値する。

## B. 津波来襲のようす

「九木浦庄屋御用留」 「此時我等は海面を能見誥居候処今だ曇止まぬ内5海中泥をかし交せ候如くにごり海底5樽のもし涌出海汐動キ候ニ付 は津浪涌出候様ニ見受候故津浪来る□□様の時は心を丈夫ニ持必ず狼狽ル事□□心得申聞せ」と海面の状態より津波の来襲を予想している。

「津なみ」では「直に浜に出て近隣の人々と地震や止む津なみやくと評議しける事半時にハ足らざるに投石島(はだか島毛なし島ともいう)より半丁ばかり沖とおもふ海面より潮の湧出るさまあかみをおびて追々強くなるにつけ人々つなみなる事を知りて詞を伝へおひおひに我も人も逃しぬ」と津波が湧出るさまを記し地震後1時間弱にて来襲した。

「九木浦庄屋御用留」も「直ニ津浪一ツ満上ル時は巳の上刻頃也」申下刻(9時頃)に地震があったことを前述したのが巳の上刻(10時頃)に津浪が来襲したと記されているから宝永時と同じように地震後1時間程で津波が来襲するということは、避難するのに十分な時間があったということである。

津波来襲のようすは、「九木浦庄屋御用留」に「此浪引行事海底頭れ二番浪一ツ来ル(中略)此浪引行事夥敷(中略)浦内の海面細長く相見へ候処又三番浪来ル(中略)然れ共引浪の烈敷事言語ニ述がたし」とあるように第2波の来る前には退潮がひどく海底があれわれ第2波の退潮では湾内が細長く見える程の退潮であることと引潮が強烈であることを記している。

尾鷲では「津なみ」によれば「ぐはらぐはらと音して土埃夥しく家土蔵碎ながら漁船も廻船も交わりていやが上に計知河原を浜ありさま気も魂も消るばかり怖しかりき」と津波の来襲がすさまじいものである事を記し「さて中村山に登り愛宕秋葉の間に憩ひて東方を眺るに廻船数艘順風に帆をあげて遙かの沖を渡りぬされハ太洋より大波の来るにハあらず」津浪がリアス式海岸の湾内のみにもみられる事に気がついている。

湾内では潮が湧出ようと記述されているが、どのような状態にあったかは、「嘉永海嘯ノ記」に「天満長浜の方に掛り舟七八般(隻の誤りか)かかり是あり此舟ウツにまかれ居る有様ハ実に恐ろしき次第」とあり、さし潮と引き潮が渦をも造る事を記しているが、「津なみ」では「沖に出合たるは無難されど雀島内に居たるハ破損の家蔵の流物或ハ諸道具杉桧材木の流木等にせかれ甚危ふかりしといへり必舟に乗りて逃げからず」と状況をよく観察し戒をも記している。

## C. 津波の被害

「九木浦庄屋御用留」には、「此時津浪流失いたし候当浦の家軒数并名前左の通」として流失家屋を列挙し「メ家数二拾七軒」と記録している。

これらの被災者は「古名地5岩地の○の人々は堀口へ逃上がり小屋掛けいたし里地岡の浜蜷倉辺りハ桑の坂嶋の助殿へ逃上り小屋掛けいたし」とあるように海岸辺りの人々が過半であったと考えられる。

またこの「九木浦庄屋御用留」には尾鷲の浦村をはじめ相賀組・木本組まで聞及んで記録している。これは、表に政策したものを参照されたい。「嘉永海嘯ノ記」には、「林浦山の端より向矢の浜一里塚の處迄は平一面の泥海也中井町(以下略)」瀬木山より東邦石油あたりまでは浸水したことを記している。町内の状況は、「津なみ」が詳しいので全文紹介する。



一 流死人百六十三人

内

十七人 南浦 七十一人 林浦 七十一人 中井浦  
三人 堀北浦 一人 天満浦

外ニ 三十一人 旅人并他所より来る持人

凡 百九十四人

波のあがりたる限大既を記

一林 仲氏 常声寺への通道角迄

一堀 祢宜町より金剛寺への通道より一丁  
はかり上まで

一今町 栢町への通道少し下迄

一畑 中畔本道限り

河筋波鼻

一中川 杉の瀬迄 計知川 坂場迄

一矢川 樋の谷出合い迄

一北浦 皆流失 橋落る

一氏神 無難

一矢浜 地下蔵の下迄二十一軒流失 氏神社流失  
円通寺半潰

一水地 無難

一天満 十二軒流失

一長浜 十軒流失

一向井 大曾根 松本 何れも無難

一漁舟流れ登し所 御浜札場に一隻念仏寺の後  
畑中に二隻今町に輸送船

一隻漁船二隻栢町ニ一隻堀に一隻此外損傷の  
舟数十隻沖に出居たるハ無難されど雀島内に居た  
るハ破損の家蔵の流物或ハ諸道具杉桧材木の流木等  
にせかれ甚危ふかりしといへり必舟に乗りて逃べからず

一回船 八十石積のイサバ下り坂へ流入三百石積の船  
八幡山の麓稻荷社の側に流入

寺

一金剛寺 鐘楼并薬師堂大破金毘羅堂禁杯石  
表門流失石垣悉崩る本堂庫裏床より  
上三尺ばかり水あがる

一念仏寺 観音堂并隠居所流失  
庫裏・大破石垣悉崩る  
一祐専寺 本堂無難  
庫裏大破石垣悉崩る  
一光円寺 安性寺 ニヶ寺とも皆無流失  
一常声寺 良源寺 ニヶ寺とも無難  
流残りたる分 破損軽重さまさま  
一高町ハ新町へ通る角より浜通り角まで  
両側残る新町へ通る道にて一軒残る  
一袋町ハ高町へ通る角ちかきあたり堅横町  
にて納屋借屋とも十軒はかり残る  
一世古町四軒残る  
右大既を記すのみ  
嘉永七年申寅十二月若林多沖識

と尾鷲の大半が被災するほどの強大な地震であったことは簡単に想像できる。  
特記すべきことは、「津なみ」にも記されているように高町付近は、この惨事からまぬがれている。  
「九木浦庄屋御用留」にも「高町は余程地面高ト相見へ申候」と驚嘆している。  
これらを素に被害表を作製した。

安政の津波被害表

地名	記 事	波高(推定 M)
水 地	四軒流失	
天 満	24軒流失、12軒半流失(大庄屋上申書) 長浜10軒流失(津なみ)	
堀 北	69軒流失(九木庄屋文書)、死者5人(大庄屋上申書)尾鷲神社拝殿祭座に4尺程潮上る、300石積(54T)の船が八幡山の麓に打ちあがる、金剛寺鐘楼薬師寺堂大破表門流失(津なみ)	6~8M
中 井	287軒流失、死者104人(内旅行者25人)(大庄屋上申書)クダリザカに80石積み(14, 5T)の船打上る(津なみ)	
野 地	26軒浸水(大庄屋上申書)	
南	199軒流失、死者23人(大庄屋上申書)、念仏寺の後の畑に漁船2隻打上る、祐専寺の庫裏大破(津なみ)、念仏寺観音堂流失、石垣崩る(念仏寺過去帳)	
林	151軒流失、6軒半流失、死者68人(内旅行者11人)(大庄屋上申書)、常声寺通道角まで波来る(津なみ)、林浦山の端泥海(念仏寺過去帳)	
矢 浜	21軒流失、3軒半流失(大庄屋上申書)、円通寺半壊、国市神社流失(津なみ)	5~6M
向 井 大 曾 根 行 野	別条なし(九木庄屋文書)	
九 木	27軒流失、63軒半流失、27軒浸水(大庄屋上申書)里地、岡の浜、蜷倉辺は桑の坂に逃げる(九木庄屋文書)	5M
早 田	27軒流失(九木庄屋文書)、神社を宮止石につないだという伝承あり	
三 木 浦	波入るが家流れず(九木庄屋文書)	
三 木 里	30軒余流失(九木庄屋文書)、7分通り流失(熊野灘漁村資料集)	
古 江	波入るが家流れず(九木庄屋文書)、海辺は石垣等破損(熊野灘漁村資料集)	

地名	記事	波高(推定 M)
賀田	70軒流失、死者14～5人(九木庄屋文書)、6分通り流失(熊野灘漁村資料集)	7～8M
曾根	15軒流失(九木庄屋文書)、6分通り流失(熊野灘漁村資料集)	
梶賀	13軒流失(九木庄屋文書)、10軒ばかり流失(熊野灘漁村資料集)	
須賀利	24軒流失、破損31軒、41軒浸水、死者1人(大庄屋上申書)	5M
島勝	在中残らず流失、寺半分流失(九木庄屋文書)	
白浦	家40軒ほど流失(九木庄屋文書)	
長島	600軒程流失、死人あり(九木庄屋文書)	4.7M

註・本表の津波推定高は、地震研究所彙報53号「三重県沿岸における宝永・安政東海地震の津波調査」羽島徳太郎、によるものである

宝永時と同程度の津波であったとされるこの安政(嘉永)時の津波は、宝永時に比して20%弱と少ない、これは冒頭において記したように6月に伊賀を中心とした地震により尾鷲地域においてもかなり大きな地震があり、中村山に小屋掛けしたという「津なみ」の記述がある。また「津なみ」の著者若林多沖は、「津なみ」の中で「今年霜月四日の津なみの有さま八百四十八年前の津なみの事を小河氏の記せしとハ大同小異なりき」と宝永時の大惨事が147年後嘉永7年まで語り伝えられていたからであろう。

要するにこれら宝永・安政(嘉永)の地震・津波の惨事をふたたびくりかえさせまいとその実態を伝え、一刻も早く高所へ避難せよと古文書は語っているのである。

### 3. 東南海地震・津波

本地震・津波の資料として収集し得たものは、「昭和地震津浪概況」(尾鷲測候所報告写)昭和地震誌(倉本為一)「矢之濱史」(矢浜公民館)・「尾鷲市に遡上した津波の調査」(地震研究所彙報56号)である。

「昭和地震津浪概況」は、地震発生からの状況及交通・通信網の状態をも記録する資料であり、「昭和地震誌」は、南輪内地区の被災調査・聞き取り調査等が収録され「矢之濱史」の表紙には、津浪到達線が地図上に示されている。

「尾鷲市街に遡上した津浪の調査」は、本津波・チリ津波を対象とした浸水高等津波の状況を総合的に調査した報告であり、当津波の到達線は当調査報告によるものである。

「昭和地震概況」は、前述したように発生から津波来襲の状況及終息後のようす等詳細に記録されているものであるから全文を紹介し概要とする。

当日午後1時35分に家屋甚しく動揺し当所微動計の軸針は折れ地震計室や事務室の振

子時計（南北に振れるもの）は止まり屋外水槽の水は溢れ無線室中縁は硝子破損の為地断せり。依って直ちに測風塔上より海岸を見渡せば何等津浪の現象はなきも万一を慮り市内官公衛及び各階代表者へ注意を与ふべく電話をかけんとしたるも局より応答なく然るに間もなく国市の浜には、白浪が見え陸上に流材を押し寄せたり。

時に午後1時50分なり既にして避難者は、続々と高所に向かって走るものあり、又間もなく浜へ帰らんとするものあるにより津浪の再来を注意し其後25分毎に尾鷲湾内の防波堤が見えかくれし午後4時13分に至って終われり

地震と同時に市外電話電信汽車も不通となり、夜に入るも電燈は点火されず

被害としては、新町、北川付近の家屋倒壊流失等甚だしく大小船舶（2Tから70T）55隻上陸して惨憺たるものあり、海軍将校の話によれば(当時津浪の最高時には、防波堤南端の灯台の点燈部の直下まで没した)、云々

津浪の方向は東より港の岸壁に向かって押し寄せ来りたるものが直に陸上に押し寄せ家屋を浮かし上陸せる船舶がこれにて当たりて倒壊させ次の引き浪にて流失せるものあり北川に2箇所の鉄筋コンクリートの橋がありこれに船舶や家屋の倒壊せるものが堰となりて津浪が川を上らずに川の西側に押し寄せしものと見え水産試験や松下工場が岸壁にあり乍らせしは建物が浮上せさりしと船舶が押しつけざりしと見らるるなり

#### 津浪来襲時刻

第1回午後1時50分

第2回午後2時07分

第3回午後2時33分

第4回午後2時58分

第5回午後3時33分

第6回午後4時13分

#### 浸水状況

尾鷲市中井浦（尾鷲郵便局付近）50CM～70CM

同町北浦（尾鷲神社の前）68CM～105CM

同町南浦（尾鷲漁業組合）255CM

同町海岸（松下鐘詰工場）290CM

同町同所（三重水産試験場）280CM

同町矢浜（下地人家付近）135CM

同町国市浜(尾鷲造船場)273CM

地震状況

- 1. 地震に因る倒壊家屋ナシ
- 1. 墓石の倒れ＝不安定なものは、南又は北に倒れ安定せるもの東より北に向かって動揺し転廻せり
- 1. 地割れ＝海岸に出来たるも由なるも浪の為不明、其他所々に小さきものあるも注意せざればわからざる程度なり
- 1. 崖崩れ＝国道尾鷲木本間道路崩壊66ヶ所、省営バスは1月下旬まで開通せず
- 1. 電信電話地震と同時に電信は不通となり8日午後3時通ず、市外電話は発震と同時に不通となり10日午後6時通ず
- 1. 汽車及電燈＝汽車は発震と同時に不通となり9日朝通ず、電燈は津浪の為電燈会社流失し翌10日夜点燈す。

△ 地震後潮の干満に異変

地震後太平洋岸(志摩郡＝南牟婁郡)の満潮位高く田畑に浸水し復旧させるため地盤の沈下と推定し対策中

△ 地震後の復旧

避難者は、学校寺院又は親戚等に寄寓し翌日より町民は各隣組より勤労作業隊を組織し、復興に従事す

△ 地震前の予感

井水の異変其他無し

この地震・津波の被害は、下表の通りであるが、北輪内地区の被災状況を記す資料は収集し得なかった。

町村別	死 亡	負 傷	行方 不明	倒 壊			流 失			半 壊			浸 水			被害 家屋 計
				住 居	非 住 居	工 場	住 居	非 住 居	工 場	住 居	非 住 居	工 場	住 居	非 住 居	工 場	
尾 鷲	38	40		104	6	6	427	35	48	120	15	21	434	17	26	1259
須賀利				5			9	72	1	57	26		83			253
九 鬼	2		2	7			50	29	1	4			182	39	1	313
古 江													2	1		2
賀 田				4	6		1	7	6	16	16		9			227
曾 根							1	1					4	2		5
梶 賀													4			4
計	40	40	2	120	6	6	859			197	57	21	8	5	8	2130

東南津波調査表

場 所	津波の高さ	浸 水 高	備 考
尾鷲市天満 102-4	531, 8cm	343cm	永井鉄工所
中井町 5-10	402, 2	90	
6-7	375, 2		床上66CM
:	347, 8	74	
栄町 8-19	418, 2	82	
北浦町 9-18	470, 0	157	
5-1	482, 5		床上97CM
5-37	488, 9	119	
5-33	504, 8	142	
10-17	425, 3	76	
8-9	392, 0	120	
1-10	480, 0	211	
11	358, 2	83	境内に小魚上がる
12		30?	70CM という 説もある。
中井町 8-1	320, 8	17	
3-11	312, 0	70	
6-37	336, 0	62	
港町 11-13	407, 3	204	
11-15	388, 6	178	
7-27	485, 3	154	
尾鷲市中井町 1-19	324, 0	99,	
12-15	299, 4	38	
港町 9-8	443, 6	222	
9-1	461, 9	196	
6-8	549, 4	214	
7-26	447, 4	105	
朝日町 5-10	522, 7	135	
8-3	417, 0	7	下駄が浮く
3-16	506, 0	166	床上124CM
林町 9-34	434, 5	124	
朝日町 9-20	366, 6	8	

場 所	津波の高さ	浸 水 高	備 考
林町 9-25	474, 4	59	
4-34	553, 0	214	カモイまで
7-4	540, 3	216	
7-27	474, 6	90	
朝日町9-27	365, 4	24	
9-1	352, 9	7	
9-10	473, 2	134	
6-13	454, 5	65	
8-9	509, 4	180	床上142CM
林町 2-4	559, 4	282	水産試験場
港町 11-2	433, 8	218	この付近で1軒 流失をまぬがれた家
栄町 1-13			旧映画館、この付近 で波先とまる
朝日町10-3			土間に潮流る
栄町 7-25		0	浸水せず
朝日町8-26		0	:
10-6		0	:
12-6			道路浸水 家に潮入らず
11-15			道路すれすれ 店に潮入らず

上表の津波調査表は、「尾鷲市街に遡上した津波の調査(地震研究所彙報56)」によるものである。



旧尾鷲町内の被害状況は、下表の戸通りである。

町内会	人家流失 倒壊戸数	同人数	人家半壊 戸数	同人数	非住居 工場 倉庫 流失数	浸水家屋	同人数
行 野						5	20
向 井	4	12				5	23
矢 浜 第 2						43	190
矢 浜 第 3	12	35	10	42	16	96	425
林 町	49	229	12	44		103	472
新 町	84	341	36	124	2	124	479
高 町	10	38	12	40	1	112	484
世 古 町	4	21	8	44	3	44	175
明 慶 町	5	32	2	14	8	41	178
北 町	41	165	34	82	10	74	277
知 古 町	38	254	10	40		64	268
川 原 町	101	382	2	12		104	403
新川原町	99	472	2	4		97	433
北 浦 第 1	1	5	4	36		90	360
北 浦 第 2	82	344	4	16	6	128	551
天 満	18	75	8	44	2	80	350
上 川 原 弥 宜 町						138	496
南 町						82	285
中 井 町						154	635
今 町						15	90
宮ノ上第1						20	80
堀 町						15	60
計	548	2405	144	542	51	1634	6734

#### 4. チリ地震・津波

本津波の資料として収集し得たものは、「広報おわせ61号」・「尾鷲市に遡上した津波の調査」(地震研究彙報56)である。

「広報おわせ61号」は、チリ地震・津波災害特集である。これには、災害日誌・被害の総括と写真をもって津波の来襲から応急対策まで報じ巻末には浸水地域図を付してその被害状況を表しているものである。「尾鷲市街に遡上した津波」は、前述したように浸水高等津波の状況を総合的に調査した報告書である。

昭和35年5月23日、チリのチエロ島沖で起きた大地震の余波は、日本沿岸まで17400kmを時速725km(秒速200m)でおしよせ翌24日、過去3回の津波とは異なり海ぶくれという型で尾鷲を襲った。

午前3時44分退潮があり、第1波は午前4時24分に1,41mを測り、54分後の5時10分に第2波、30分後の5時40分に最大の3,17mを記録し、5時40分まで23波を記録し、以後29日午前7時30分に検潮機の異常振動は終了した。

市内各地の最大波高は、尾鷲-3,17m・須賀利-2,21m・九鬼-1,48m・三木里-1,48m・古江-1,18m・賀田-1,48mを記録した。

この津波の特徴は、前回(昭和19年)に比較すれば侵入速度の遅さがあげられるだろう。しかし侵入速度とはうって変わった退潮時の勢いは強烈であり、漁船・ドラム缶・材木をはじめ土砂・家具までも海に引きづりこんだ。

この津波による被害は、未明を急襲されたため浸水地域の家財道具が冠水または、流失し、植付まもない水田が潮と土砂に埋没するという惨事となった。

被害総額は4億1千89万円(建造物2億7千万・水産業関係3千235万3千)・農業関係1千218万・林業関係1千334万5千)・土木関係850万・商工業関係7千257万4千・消防関係163万8千・教育関係30万)となった。

被害状況は以下のとおりである。

	被害人数		負傷	建物の被害					合計
	合計	床上以上の被災者数		全壊	流失	半壊	床上浸水	床下浸水	
尾鷲	2605	1671	1	8(2)	6(5)	9(6)	396(19)	226(7)	645(3)
須賀利	478	326					76(3)	26	102(3?)
賀田	209	21					8(3)	57(11)	65(?)
曾根	5							3(2)	3(2)
計	3297	2018	1	8(2)	6(5)	9(6)	480(25)	312(20)	815(?)

( )内は非住居を内書

浸水高等は下表の通り、「尾鷲市街に遡上した津波の調査」による  
チリ津波調査表

場 所	津波の高さ	浸 水 高	備 考
尾鷲市天満 10 2 - 4	3 6 2, 8 c m	1 7 4 c m	永井鉄工所
中井町 5 - 1 0			床下浸水
6 - 9		1 0	
6 - 8	2 7 3, 8		道路浸水なし
栄 町 8 - 1 9			川一杯にあふれる
北 浦 9 - 1 8			道路浸水
5 - 3 7			:
中井町 6 - 3 7			浸水せず
港 町 1 1 - 1 5	2 6 4		床下浸水
7 - 2 7			床上 3 0 c m
中井町 1 - 1 9	2 3 0	3	タタキがぬれる
1 2 - 1 5			道路面つかり、 店に潮入らず
港 町 9 - 8	2 4 0	4 9	
9 - 1	3 1 0	4 3	
6 - 8			道路浸水
7 - 2 6			道路浸水せず
朝日町 5 - 1 0			浸水せず
3 - 1 5	3 2 2, 4	5	
林 町 9 - 3 4			浸水せず
朝日町 9 - 2 0			:
林 町 4 - 3 4			:
7 - 4			:
朝日町 9 - 2 7			:
6 - 1 0			:
6 - 1 3			:
8 - 9			:
1 - 1 8	3 4 3, 3	1 2 4	
林 町 2 - 4	3 6 1, 4	8 4	水産試験場
中井町 3 - 2 9	2 4 1, 9	2 7	床下浸水
4 - 2 3	3 0 7, 5	8 8	

場 所	津波の高さ	浸水高	備 考
港 町 1 2 - 2 1	2 8 9, 4	6 5	
1 2 - 2 3	3 0 0, 2	9 5	床上浸水
1 3 - 3	2 8 6, 1	7 5	:
1 1 - 2	2 7 7, 8	6 2	
1 0 - 1 9	2 8 9, 4	8 3	床上浸水
1 - 9	2 9 4, 3	6 5	道路上 6 5 c m 浸水
1 - 1	3 1 7, 4	9 3	床上 3 0 c m
1 3 - 2 4	2 6 6, 3	4 0	
北浦町 3 - 5	2 9 3, 0	9 2	床上浸水
港 町 1 3 - 2 2	2 6 0, 0	4 1	
5 - 8	2 7 0, 0		浸水せず?

24日午前10時20分災害救助法が発令され、市役所には災害対策本部が設置された。被災者には、水・食事等が配給され防疫・井戸換作業が精力的におこなわれ、青年団・高校生も勤労奉仕にあたった。

## 5. おわりに

宝永時の惨事の教訓を安政（嘉永）時に生かし被害を最小限にとどめたように、今日我々も過去4回の地震・津波の悲惨な教訓を無視せずに災害防止に役立てる事が先人に報いる唯一の方法であろう。

尾鷲地震・津波年表は、「尾鷲市年表」・「写真・図説地震」より樋口きさゑが作成したものである。

（郷土室 田崎通雅）

## 尾鷲地震津波年表

西 曆	年 号	事 項
6 8 3	天武 1 2	東南海地震(伊豆島噴火)
6 8 4	1 3	1 0 月 1 4 日、震源地東南海底・M 8, 4
7 3 4	天平 6	4 月 7 日熊野大地震の倉崩れ嶺より火の玉東海に飛ぶM 7
7 5 1	天平 勝宝 3	6 月熊野大地震
8 8 7	仁和 3	7 月 3 0 日震源地東南海底津波よせ流死者多しM 8, 6
9 2 2	延貴 2 2	熊野大地震山を崩し浦々に波は入り玉石出で壺水湧き出るM 7
1 3 3 1	元弘 1	紀伊国に地震ありM 7
1 3 6 0	正平 1 5	1 0 月 4 ・ 5 . 6 日地震つづき 6 日沿岸津波あり人多く死す
1 3 6 1	1 6	6 月 2 4 日南海地震場の峰温泉とまり沿岸に津波襲うM 8, 4
1 4 0 7	応永 1 4	1 2 月熊野大地震 3 日に及ぶ
1 4 9 8	明応 7	9 月 2 0 日紀伊・伊勢・志摩沿岸に津波起こる流死一万人M 8. 6
1 6 0 4	慶長 9	1 2 月 1 6 日津波あり人家流失までにいたらずM 7, 9
1 6 4 9	慶安 2	熊野大地震M 7, 1
1 7 0 7	宝永 4	1 0 月 4 日午刻大地震、津波来襲M 8, 4
1 7 7 0	明和 7	1 0 月 1 日地震あり人々避難するも津波なしM 7, 4
1 8 5 4	嘉永 7	6 月 1 4 日大地震、津波を恐れて中村山に小屋掛け 1 1 月 4 日大地震・津波M 8, 4
1 8 5 5	安政 2	9 月 4 日大地震、波 5 尺満つ
1 8 9 9	明治 3 2	3 月 7 日地震死者 7 人潰家 2 半壊 6 道路決壊 5 0 ヶ所、 人々七日間避難するM 7, 6
1 9 0 6	明治 3 9	5 月地震高波、天満石垣崩れる、死者 7 人
1 9 4 4	昭和 1 9	1 2 月 7 日東南海地震おきる、流死者 6 5 人M 8
1 9 4 6	昭和 2 1	南海大地震、沿岸一帯の沈下著し
1 9 6 0	昭和 3 5	5 月 2 4 日チリ津波午前 4 時 2 4 分来襲
1 9 7 2	昭和 4 7	1 2 月 4 日八丈島東方沖で地震、尾鷲で 4 0 c m 測る
1 9 7 5	昭和 5 0	1 0 月 3 1 日フィリピン東方沖で地震尾鷲で 5 0 c m 測る

注一昭和 4 7 ・ 5 0 年の記録は、尾鷲観測所資料による

建設御遺跡指定図

- H 1 一畑目黒原集の前まで (宝永泡盛ノ記)
- H 2 一畑湯の集まで (宝永泡盛ノ記)
- H 3 一野地は下横町分通り流れる (宝永泡盛ノ記)
- A 1 一常声寺への通道角まで (津なみ)
- A 2 一畑は本堂町より金剛寺への通道より / 丁ばかり上まで (津なみ)
- A 3 一今町は越前への通道角下まで (津なみ)
- A 4 一中川は杉の頭まで (津なみ)
- A 5 一計知川(北川)坂場まで (津なみ)
- A 6 一矢川峠の谷出合まで (津なみ)
- A 7 一円通寺半壁 (津なみ)
- A 8 一杯瀬山の端より向矢の坂 / 里塚の所までは  
平一面の記号なり (念仏寺過去帳)
- A 9

■記は御遺跡内であっても無紋書及び被書画の出ば  
同じ御遺跡のときは、古い津波が優先する



宝永の津波 H .....  
安政の津波 A - - - - -  
東南海津波 T - · - · -  
チリ津波 C —————